

## まなびこしかた 附著述目録

工藤力男

本研究科の国文学専攻では、定年退職する教員に慶賀の意をこめて紀要を編む慣わしがある。その巻末に、業績目録にそえて経歴をつづる文章を載せる先例もある。他人の生活誌など誰が読むものか、と拒んだのだが、論文は読む気にはならなくても、生活誌なら読む気になることがある、と編集者はのたまう。そこで蛮勇を奮つていささか辞句を弄するものである。著述目録は余りにも貧しくて恥じ入るばかりである。記述にあたっては、縦組みにするので年紀は元号による。

### 中学校まで

わたしの郷里新屋<sup>あらや</sup>は北国街道、秋田砂丘内側の町である。そうして秋田城下の胃袋を支えた町の一つである。昭和十三年秋、わたしは貧しい労働者の家に生まれた。三歳上の兄と二歳上の姉があり、のちに妹と弟が生まれ

た。祖父母の記憶はない。この町は、豊かな地下水を使った酒・味噌・醤油・酢の製造が盛んで、それは雄物川の水運を利用して内陸に販路を広げていた。

成人男子なら三十分も歩くと日本海に出られた。東北方の空遠くに秋田平野を限る太平山の美しい姿を眺めて少年時代をすごした。海と川はあったが、少年が遊ぶ山には恵まれなかった。その代わりというべきか、砂丘には海岸奉行栗田定之丞の功績による、黒松の防風林が広がっていた。近年は宅地への転換が進んだが、往時、その林の松落葉は貧しい我が家の燃料になり、松露などのきのこがときどき食卓に上った。きょうだいが母に従う松の落葉掻きは、時に鍋や七輪などを提げて行き、松林で野餐をすることがあった。楽しい「鍋こ遠足」である。砂丘には、松の苗木を風から守るために植えたぐみの木が無数に残っており、野遊びしてその実をついばむことが少年の日の秋の楽しみであった。砂丘にしみこんだ水は湧水となつて人々の生活を潤し、今も名水が残っている。戦前から町のはずれに進出したパルプ工場に新しい住民が住み、経済面のみならず、文化面でも新しい刺激を与え、小さいながら活気のある町であった。

貧しくて活字も書物も乏しい家だったが、兄は『野球少年』、姉は『少女』を毎月購読していた。ほかに、カバヤ食品の点数を交換して得た「カバヤ文庫」があり、少年向きに書き直された世界の名作数十冊だけが、身近な書物であった。小学校六年のとき、わたしも『少年』の購読が許された。毎月、町の書店にそれが届く日、書店主が荷をほどくの待ちかねて受け取って帰るのであった。中学校一年のとき、高校に進学した兄から新聞配達を引き継いだ。町内の五十数軒にすぎなかったが、他人の手を借りずに起床すること、雨も風も雪も耐えねばならないものであることを学んだ。そのわずかな収入で『少年』と『科学讀賣』を購読した。

『少年』といえは、手塚治虫の鉄腕アトムが「アトム大使」の題名で登場したときからわたしは読んでいて、天馬博士の表情も記憶している。最も深く印象に残った読み物は、椋鳩十の「片耳の大鹿」であった。ほかに、筋は忘れたが、棟田博の兵隊ものの中篇「密林の歌」を覚えている。江戸川乱歩の「透明人間」も掲載されたが、透明なはずの人間の影が描かれた、不可解な挿絵しか記憶にない。

『少年』を購読したころ、よく掲載されたサトウ・ハチローの詩に興味をいだいた。そこで、いとこ・きょうだい・級友から、借りては写し、貰っては切りぬき、昭和廿四年から三年間ほどの作品百篇を集めた。その小さなノート三冊が手元に残っている。第一冊の表紙には、「少年詩集 第一集 サトウ・ハチロー作詩 一年A組 工藤力男編集」とある。掲載誌は『野球少年』『面白ブック』が断然多く、『少年』がそれに続き、『少年クラブ』『中学生の友』が若干で、『少女』からの一篇がある。「グラウンドに立ちてながむれば／はるかなる山々の木々／おとといよりきのう——きのうよりきょう／あるいは黄ばみ あるいはもみじなすを感ず／——ああ つかみゆく秋のしるしなり」。『野球少年』に載った「秋ふかみゆくころ」の一節である。なんといいこともない詩なのだが、文語の調べの快さで記憶に残った。

中学一年の時だったと思う、町のパルプ工場から中学校に図書購入費が寄贈された。学校では、校舎二階の廊下の突き当りを仕切って図書室にし、千冊ほどの図書を並べた。生徒から図書委員を募ったので、わたしは志願して委員の一人になった。そこで図書の出納、補修、製本を学び、世界の名作と称せられる作品をむさぼり読んだ。

中学一年の正月、僅かな年玉を手にして入った書店で、岩波文庫の『啄木歌集』を見つけて購入し、たちまち

啄木の魅力の虜になった。そして我が心に鎮めがたい爆弾を抱え込むことになる。おりしも、昭和廿八年九月から翌年にかけて、岩波書店版『啄木全集』全十六巻が刊行された。自分が買いそろえた最初の全集である。三年生の時、NHK学校音楽コンクールの合唱部門に出場すべく混声合唱の一員として選ばれた。これから合唱との付き合いが長く続くことになる。中学校から高校にかけて、角川文庫の『次郎物語』五部作を愛読した。

中学校の教科はどれも好きだったが、特に数学の幾何の分野がおもしろかった。

### 高校時代

昭和廿九年四月、秋田県立秋田高等学校に進学した。しかし、ある不満から勉学に偏りが生じ、第一学期の成績は半分が落第点であった。学級担任、佐々木勉先生の親切な忠告にも耳をかさず、七月で退学した。その後は、家でぶらぶらしながら、詩作の真似事をしたりしていた。日活が映画の製作を再開し、その第一作「からたちの花」を見て、北原白秋とその郷里柳川の風土に強く引かれ、『思ひ出』『邪宗門』を手にした。北国の啄木とは違う魅力であった。小説は、郷土の生んだ作家、石川達三の作品を多く読んだ。

その秋、縁あって宮城県出身の隣人の知遇を得、その母堂がひとりぐらしをする家で一緒に暮らさないと持ちかけられた。わたしは高校生活をやりなおすことを決意し、その年の暮れ、ひとり郷里をあとにした。伊具郡金山町の中心部にある元町長宅に住み、老婦人との生活が始まった。農村の古い慣習をよく伝えるこの町での生活は、きわめて貴重な経験を積ませてくれた。明けて昭和三十年四月、宮城県立角田高等学校に入學し、国鉄バスで通学する。良き学友に恵まれた。だが、二年生の五月初め、日光の華嚴の滝の巖頭周辺をさまよって警察に

保護された。二日後、秋田から迎えに来た兄と伯父に引き渡された。秋田に向かう列車の窓から見た米沢盆地は林檎の花盛りであった。ロシア民謡「りんごの花ほころび、川面に霞たち、君亡き里にも、春は忍び寄りぬ」を耳にすると、今も胸が痛む。

兄がその学校の教務課に勤めていた縁故で、秋田短期大学附属高等学校に編入学を許された。この学校では学業に苦勞することはなかったが、生活に張り合いが生まれることもなかった。余暇は多く映画館に足を運ぶことで費やされ、年間の観賞作は百本を下らない。

この年、九月下旬の三日間、盛岡、渋民に旅して啄木のゆかりの地をめぐる。担任の吉田栄先生の国語の授業は楽しかった。東北大学の岡崎義恵のこともこの先生に教わった。授業で立原道造の詩を知り、繊細でやわらかな抒情が心にしみ、角川文庫の『立原道造詩集』を愛読した。「夢はいつもかへつて行つた 山の麓のさびしい村に 水引草に風が立ち 草ひばりのうたひやまない しづまりかへつた午さがりの林道を」(「のちのおもひに」『萱草に寄す』)。級長の佐川広治君は秋田では少年俳人として知られていた。翌年、彼の主導で文藝部の機関誌『逆流』が創刊され、わたしも参加して「盛岡・渋民紀行」を書いた。

就職難の時代であった。僅かに受験できた郷里の町のパルプ工場は、最終面接で落第した。ややこしい経歴が災いしたのだと思う。昭和三十三年三月、進路も決まらぬままに同校を卒業した。高等学校の履歴が傷になるなら、大学卒業で帳消しにしようと大学進学を決意し、自宅での自学自習を開始した。時間だけは潤沢だったのでよく散歩し、身辺を観察する習慣が身についた。佐川君の影響だろう、歳時記を座右に置くようになり、特に加藤楸邨をまねて俳句を習作するようになった。「麦を踏む子の悲しみを父は知らず」(楸邨『寒雷』)。

受験勉強の中で知った小西甚一『古文研究法』は名著だと思う。これを読むことによって日本の古典がわかったと実感できたのである。保坂弘司には、『現代文の総合的研究』と国語の受験雑誌『學燈』、さらに人生論の月刊誌『若人』を通して私淑した。ほかに国語は関良一、塩田良平、日本史は西山松之助の参考書に学んだ。三つの高等学校を渡り歩いているうちに学んでいない分野が多くできた。数学もその一つで、特に対数は自習できなかった。東北大学の過去の入試問題を見ると、対数の出題されることが多かったので、それがあまり出ていない金沢大学に出願した。

#### 金沢大学時代

昭和三十四年四月、金沢大学法文学部文学科に入学した。勤勉な学生であった。新入生歓迎会で男声合唱組曲「柳川風俗詩」を聞いて陶醉し、即座に金沢大学合唱団に入った。その年の十一月末、金沢大学合唱団の一員として、札幌市で開かれた全日本合唱コンクールに出場した。その帰途、わたしは一行と別れ、札幌、釧路、小樽、函館に石川啄木ゆかりの地を訪ねた。釧路では新聞記者時代の啄木と交友のあった、料亭「しゃも寅」の芸妓小奴こと、近江ジンさんを訪問した。近江さんは病氣療養中であつたが、寢床を畳んで、一時間ほど話してくれた。これを形見として我が啄木遍歴はおわつた。近江さんは、六年後の昭和四十年二月十七日、東京都南多摩郡の老人ホームで七十六歳の生涯を閉じた。

学業と合唱活動のほかに、文学科の級友に声をかけて読書会を結成した。月に一度、各自が選んだ書物を順番に読んで話し合うもので、六人ほどが参加した。回覧雑誌『狂妄』を作つて評論めいたものを書いた。これは六

号まで続いたが、手もとには一冊も残っていない。

二年次は政治の季節であった。日米安全保障条約の改定が日程に上ったのである。全学連傘下にあった学生自治会は連日のように示威行進をし、学級討論を設定し、ストライキを打ち、国会への動員も頻繁であった。東大の学生・樺美智子さんが死亡し、国会議事堂を学生の占拠するところとなったが、条約の自然成立とともに運動の熱気は急速にさめていった。

二年次の夏休み、立原道造のゆかりの地、信州の追分・軽井沢をめぐる。道造への傾倒から堀辰雄の作品世界にも親近感をいだいてよく読んだ。文弱の徒ではあったが、哲学好きにはなれなかった。アプレゲールなのである。

後期から専門課程に進んだ。漠然と言語学を勉強したいと思っていたのだが、教養課程でドイツ語を履修しなかった。言語学は無理と知り、国語国文学専攻に進んだ。国文では、教授の天津有一先生に源氏物語を、助教授の川口久雄先生に今昔物語・大鏡を、助教授の高羽五郎先生に仮名書き論語・西方指南抄・仏説阿弥陀経を、助教授の本田康雄先生に洒落本・浮世草子を、講師の浅井清先生に藤村・鷗外・漱石などを教わった。圧倒的に東大出身の先生が多かった。他の専攻では、鈴木直治先生に論語、岩井隆盛先生に朝鮮語、松本克己先生にラテン語の手ほどきを受けた。夏休みの集中講義は、池上禎造先生の「国語学史」、井本農一先生の「芭蕉俳諧」を受けた。

金沢大学の前身第四高等学校は多くの詩人を輩出したが、とりわけ井上靖の透明にして清冽な詩情に引かれ、初めて散文詩のよさを知った。彼の詩集『北国』を携えては、砂丘に葡萄島に向いた。三年次の昭和三十六年

春、文藝部に入部した。その秋、北陸三県大学学生交歓芸術祭の俳句部門に「千九百六十年初夏」（十句）を投稿して第二席になる。「子燕の高く迷へり学連歌」。

昭和三十七年二月「国語国字問題論」を金沢大学文藝部の『焰』十四号に、続篇を十五号に発表した。これは、前年、国語審議会における「送り仮名の付け方」の答申案をめぐる対立に発して、国民を巻き込む大論争に拡大していた問題を論じたものである。前篇は、『文学界』四月号の「同人雑誌評」で小松伸六氏の好評を得た。夏、愛知県の教員採用試験をうけに名古屋に赴く途中、島崎藤村ゆかりの馬籠と妻籠を訪ねた。その年の暮れから翌年にかけて、北陸地方は「三八豪雪」と呼ばれる未曾有の大雪に見舞われた。

昭和三十八年三月、金沢大学法文学部を卒業した。卒業論文は、「がー主格助詞から接続助詞へ」百枚。これは、「作用性用言反撥の法則」を発見して石垣謙二の名を世に知らしめた名論文「主格「が」助詞から接続「が」助詞へ」（『助詞の歴史的研究』所収）に小瑕ありとして、その克服を意図したものである。当時、日本の文法学界は時枝誠記の学説への支持と疑問が錯綜し、活発な議論が展開されていたが、卒業論文作成にあたって抛り所にした文法理論は山田孝雄のものであった。

#### 高校教員時代

昭和三十八年四月は、戦後のいわゆるベビーブーム世代が高校に入学するので、いずこも教員不足が予想されていた。金沢大学にもいくつかの教育委員会から求人に向向してきた。わたしは、大学時代に病みつきになった合唱を続けるべく、愛知の県立高校を選んだ。幸いにして名古屋市港区にある惟信高等学校に配せられた。伊勢



湾台風の傷がまだ癒えず、学校の図書館には水を吸って膨張した本が多く配架されたままであった。

惟信高校の一年生は五十五人学級が十一、第二学年は五十人学級が八つだったから、まさにベビーブームを絵にかいたような状況である。だからといって不平や不満を感じたことはない。生徒たちと万葉集を読む会を作り、斎藤茂吉『萬葉秀歌』、池田弥三郎・山本健吉『萬葉百歌』を比べながら読んだ。何の用事であったか、東京出張の帰り、沼津に途中下車して井上靖の詩が生まれた千本松原にたずんだことがある。

合唱団は東海メールクワイアー。この合唱団の名は全国に聞こえ、学生時代、中部や全日本のコンクールで、その柔らかく力強いハーモニーに魅了されていたのである。練習のある木曜は高校の職員会議の日でもある。練習に後れはしないかといつも気をもむのであった。この団では著名な声楽家の前で一人ずつ歌う練習が稀にある。三宅春恵、畑中良輔などの前で歌うときの緊張は名状しがたいものであった。入団二年め、仙台で行われた全日本合唱コンクール一般の部に出場し、随意曲として清水脩作曲「智恵子抄巻末の歌六首」を初演して優勝した。それを記念に退団し、合唱道楽に終止符を打った。

校務の傍らに読んで特に印象づけられた本は、まず日本古典文学大系の『萬葉集』。卒業の前年に全四冊の刊行が済んでおり、特に大野晋氏の手になる語学の注の鮮やかさ・斬新さに圧倒された。平凡社の『日本語の歴史』全七冊は、専門書の体裁をとらない書物である。数人の書いた原稿を亀井孝氏がリライトするという方式で編まれた、興味尽きない本であった。大学の教室で国語史を講ずるときはいつも、必読の参考書としてこれを推奨したが、どれだけの方が読んだことだろうか。いま、平凡社ライブラリーに収録されていることはうれしい。高校の同級生であった佐川君を介して入手したのが阪倉篤義氏の『語構成の研究』である。日本書紀古訓によつ

て古代日本語の語構成を考えるとという着眼が新鮮だった。のちに親しく教えを請うことになるうとは予想だにできなかった。

惟信高校の校長は大学進学の実績を上げることに熱心で、通常の授業を重視したい我が方針と合わなかった。そこで、四年目の秋に退職を決意して、大学院受験を決意した。

#### 京都大学大学院時代

前年秋に受験を決意したのだが、卒業以来、特に勉強していたわけではなく、新たに論文も書いていない。やむなく四年前の卒業論文を添えて、京都大学大学院修士課程に願書を出した。金沢大学の国文学科には東大出身の先生が多かったのだが、国語学を学ぼうとしたとき、遠藤嘉基、濱田敦、池上禎造、阪倉篤義、渡辺実といった諸先生の名が浮かび、京都を選ぶことにためらいはなかった。

入学試験の口述試問の試験官は、野間光辰、濱田敦の両先生、それに若い先生であった。我が卒業論文についてこの人が繰り出す細かい質問には往生した。この人は佐竹昭広先生で、東京高校の学生時代、そこに受講していた石垣謙二の授業に深く感銘していたのだという。そう考えると、四年前の論文を提出したことは、この上ない僥倖だったのである。

右に書いた五先生のうち、遠藤先生は退官後だったが、大阪大学に転出した池上先生の講義は続いていたので、二年間その聲咳に触れ、「日本文字史の構想」「語彙論序説」を聴くことができた。野間先生からは近世文人の書簡の読み方を懇切丁寧に教わり、佐竹先生の教室では「犬つくば集」「東海道中膝栗毛」を読んだ。

濱田先生の講義題目は「和名抄の地名」。前年秋に刊行された池邊彌『倭名類聚抄郷名考證』と、ご自身が複製の刊行を推進した郵岡良弼『日本地理志料』を自在に扱つての講義であつた。アイヌ語由来らしい地名が多い秋田で育つたせいで、地名に寄せる関心はかねて強かつたので、濱田先生の講義は自分をすっかり魅了した。後に先生の講義を引き継ぐ形で倭名抄の地名を考察することになる。『倭名類聚抄郷名考證』の著者・池邊氏は成城大学短期大学の教授、濱田先生は成城高等学校の卒業生、そしてわたしは後に成城大学に赴任する。なんと、いう奇縁であろうか。

すでに『語構成の研究』を読んで深い感銘を受けていた阪倉先生から、「語義の研究」の講義で意味の考え方を学ぶことができた。渡辺先生の「副用語の研究」は、品詞論の掃き溜めとも呼ばれる副用語を、先生の文法論の視点から鮮やかに説明しおおせる講義であつた。これを受講することで、渡辺先生の文法論が理解できた、と実感しえたのである。

高等学校勤務の四年間の貯蓄はあまりにも乏しい。修士課程を二年間で終えなくては、学資が続かなかつた。しかし、修士論文の展望はなかなか開けなかつた。七月には神経衰弱ぎみになって精神科の診断を仰いだ。医師はしばらく旅行をするように勧めたので、懐をはたいて金沢に旅し、旧友に逢つて数日を過ごした。不思議なもので、旅のあとには展望がひらけ、問題を捉えることができたのである。作業は一気に進み、萬葉集の訓仮名を考える方向が定まつた。

既に東京で勃発していた大学紛争が西にも広がり、京都大学も騒然としはじめた。水際作戦で論文執筆にいそしむ身としては、ただうろたえるばかりであつた。明けて昭和四十四年一月十七日、修士論文「万葉集複訓仮名

の考察」(五十枚)を提出した。学生部に始まった全共闘派による校舎の封鎖は文学部棟にも広がり、二月末には本部棟の時計台の上から火炎瓶が降った。修士論文の口述試問は延期された。

学年末の学事もないまま新年度に入った。前年来の聖母女学院高校の非常勤講師に加えて、野間先生のご紹介で得た、天理大学の「国語」と「萬葉集演習」で糊口をしのぐことになる。五月に京都大学での開催が予定されていた国語学会春季大会は、毎日新聞京都支局ホールに移すことが決まり、阪倉先生の勧めで修士論文の一部を発表した。催涙ガスの中での全国大会と言われたものである。

その論文の趣旨は、萬葉集で複数の訓を負うて用いられているように見える訓仮名は、その用例数に著しい偏りがあり、用例が極端に少ない訓は再考の余地あり、というものであった。例えば、狭(セ1 サ26)について言うと、セ一例は「うらめしと思狭名盤ありしかばよそのみそ見し心は思へど」(2522)の第二句に見え、一般に「思ひて背なは」と訓ぜられている。この訓は、萬葉集の表記法からも歌意からも、いかにもおかしい。そこで、「たけなは」の類語「さなは」を想定して、「思ふさなはに」と改訓することを主張したものである。これを書き直した「複訓仮名」は、その年の秋『國語國文』の十一月号に掲載された。わが学術論文の処女作である。国語学国文学専攻では、修士論文の口述試問もないままに、国費留学生一名以外、博士課程への進級は認められなかった。かくてわたしの職歴には新たな空白が生ずることになった。夏、大阪府の高等学校教員採用試験を受け、採用候補者名簿に登録された。

浪人生活のわたしを哀れんで、野間先生が桑原武夫氏を紹介してくれた。筑摩書房〈日本の思想〉の『新井白石集』に協力せよ、ということであった。そこで、『東雅』総論と白石書簡の、口語訳・注・解説を担当した。

桑原邸の書齋で親しく話を聞き、桑原氏の学びの系譜、思考の方法、執筆の秘訣、人間観を知るなどの余録もあった。

### 再び高校教員時代

昭和四十五年四月、和歌山県境に近い大阪府立佐野高等学校教諭になった。岸和田市の文化住宅と称する木造の長屋に住み、南海電車で通勤するのであった。住まいのすぐ近くに行基が開いた久米田寺と久米田池があり、往還には「小栗街道」の古い道標が残り、和泉の国の歴史の重さを実感した。泉南地方は、農業のかたわらオパール製造を営む家が多くて豊かで、のんびりと育った生徒たちは概して勉強嫌いであった。大学院で学んだことを生徒に注ぎこもうと、我が教育意欲は旺んで、大学院に進む以前の授業とは格段の差が生じていたことを実感した。

十一月、三島由紀夫が自裁した。翌年、抽籤で公団住宅が当たった。所は高槻市で、和泉佐野までは通勤できない。そこで転勤願いが容れられた。

四十六年四月から大阪府立阿倍野高等学校に転じた。高槻から阿倍野まで、満員電車での通勤は厳しかった。それに、一歳に満たない長男を、教員組合が作った保育園に、学校事務員として勤め始めた妻と交替で送迎する負担も加わった。この学校は、まじめでよく勉強する生徒が多く、教員としての生活は充実していた。第三学期になって、佐竹先生の推薦で広島女子大学への就職が決まった。次年度の担当がぼんやり決まっていたので、生徒たちに小さな動揺が起こり、涙顔で抗議されることもあった。かくて四十七年三月、高校教諭の職を辞した。

## 広島女子大学時代

昭和四十七年四月、広島女子大学文学部講師として赴任した。土井忠生学長はわたしの履歴書を前にして、ずいぶん賑やかだね、と笑った。わたしは、シュトルムウントドラंकで、と答えるだけだった。

この大学は二学部だけの小さな学校である。若い教員が新しい官舎にまわって入居したので、テニス、サイクリング、ハイキングなどで交流することが多く、楽しい日々をすごすことができた。当然、子供たちの年齢も近く、遊び相手にことかかなかった。官舎は海に近く、牡蠣を剥く作業場が幾棟もあって、子供を連れて散歩の途次に立ち寄っては飽かず眺めた。

国文学科は、漢文学の高橋清教授、文体論の木原茂教授、中世文学の友久武文教授、近代文学の広藤玲子教授、方言学の神鳥武彦教授、漱石研究ですでに名を挙げていた相原和邦助教授で固めていた。研究室が隣だったこともあって、温和な友久教授に格別に懇意にもらった。田植歌の権威者である氏に付いて花田植えの調査に行ったり、高松へ幸若舞の写本の撮影に出向いたりした。氏から手ほどきを受けた連句は、今もなお我が乏しい道楽の一つである。

広島県を中心に中国地方出身の学生が多いことは当然だが、九州、四国の学生もいて、西国の方言や民俗を知ることが、東国暮らしの長い自分にはおもしろかった。人なつこい学生が多く、図書館で調べものをしてると寄ってきて、声をかけたり質問したりするのであった。

一年に一篇は書くべし、野間先生のこの論しを胸に日々を過ごした。論文執筆の好機は無論夏休みである。広島島の夏は暑い。冷房設備のない研究室で、腕にタオルを巻いて原稿用紙などを汗の汚れから防ぐのであった。こ

うして書いた論文、「略訓」「上代形容詞語幹の用法について」「古代複合形容詞の一問題―清明の旧訓をめぐって―」は『國語國文』に続けて掲載された。着任した翌年、十月から半年間の研修を許されて京都大学に内地留学した。おりしも出講中の大阪市立大学の小島憲之先生の「新撰萬葉集」の講義を聴くほか、日本書紀の古訓を中心に勉強した。

翌四十九年十二月、国語学会中国四国支部創設廿周年記念大会で、「スミノエからスミヨシへ―古代形容詞形成の一視点―」を発表した。奈良時代の文献に見えた狭・豊・異・速・吉が後世に残らなかつた原因を考え、エ列一音節の形状言は不安定で、母音交替と語形の肥大化によって派生した形で伝わつたのだとした。従来の研究の盲点を衝いた会心作なのだが、土井学長の感想は、「工藤君のは手品みたいなもんだな」であつた。これは『萬葉』九十号掲載の論文に結実した。万葉学会への初登場である。

着任して三年後の五十年四月、助教授に昇任した。その秋、岐阜大学教育学部から転勤の意思を打診された。わたしは秋田の出身、妻の両親は名古屋に住んでいる。広島で諸氏から受けた恩は大きい、岐阜行きの話は魅力的だつた。後任がすぐには得られそうになくて翌年四月は無理だとして、半年遅れて赴任することになった。そのため、二科目については前学期のうちに一年分の授業をしたので多忙であつた。

頻繁に開かれた送別会のうち、四年半の日々を楽しく過ごした秋の広島を後にした。

#### 岐阜大学時代

昭和五十一年十月一日、半月前の台風に襲われた岐阜の町は大水害の跡が生々しかったが、大学の構内には噺

せるような金木犀の香りが漂っていた。

国語教育講座には、近代文学と演劇の永平和雄教授、雑俳の権威・鈴木勝忠教授、漢字音の論客・高松政雄教授、上代語と文法の浅見徹教授、古今集研究の田中喜美春助教授、唐詩に詳しい安東俊六助教授がいた。教育学部なのに国語教育の専門家を置かず、文学部と変わらなかった。いずれの教官も学生に厳しく、卒業論文の口述試問では泣き出す学生もあった。国立大学の教育学部は学生定員が少ない。しかも一年半は教養部に籍を置くので、教員の授業の負担も軽く、好きなことを自由に勉強することができた。

誰の紹介であったか、朝日カルチャーセンター岐阜高島屋教室で萬葉集を講ずることが求められ、五十四年五月から、月二回、金曜の午後、講壇に立った。定員廿四人の受講者は大半が婦人で缺員がなかった。熱心な受講者に対する二時間の講義は、いつも快い疲労で満たされた。講義は巻第一から始めたが、巻序に捉われず縦横に講じて十年で読み終え、折り返してさらに四年続いた。ゆかりの地への旅行は五回に達した。講義のために準備した膨大なノートは、わたしの大きな財産である。

このころ書いたものには、まず阪倉先生の還暦祝賀論文集『論集 日本語・日本文学』の中世の冊に寄せた「中世形容詞の終焉」がある。武し・茂し・むくつけし・豊けし・遍しなど、私に「エ列音形容詞」と名づける一群の形容詞が、中世を境に消滅した原因を考察したもの。初めて中世語を扱った、わたしの最も愛着深い論文である。また、萬葉歌に状態を表わす副詞句「とをを」があり、その歌の異伝「たわたわ」があるが、トワとタワは母音交替の関係、タワワとタワタワは相補分布の関係にあることを明らかにして、「多和々々」は「多和々々二」などの誤写の蓋然性があることを主張した「形状言による副詞句の形成」などがある。



中国の北京に開設された日本語研修センター、俗称「大平学校」への出講を打診されたのは五十六年秋のことである。国際交流基金が毎年二億円と人を出して運営し、中国全土から百二十人の日本語教員を選んで一年のあいだ再教育する、当面は五年間の計画である。文化大革命の悲惨さから、中国は好きになれない国であったが、ただで外国見物ができるなら行ってみようか、と極めて功利的な判断でそれを受諾した。他国を訪問するならば、その国の言語を学んでいくのが礼儀である。そこで、日中友好協会の教室に通い、ラジオとテレビの講座で発音の基礎と文法を勉強した。

昭和五十七年三月末、迎春花が満開の北京に着いた。この期の講師は、語彙論が吉澤典男氏、近代文学が平岡敏夫氏、音声学が大坪一夫氏、対照研究が中川正之氏、精読が姫野昌子氏。わたしの担当は文法で、主に文法研究史とアスペクトを講ぜよと言われた。ほかに、佐治圭三主任のもとで教室を運営する若い四人がいた。この人たちの献身的なはたらきで、センターは順調に機能していた。わたしが特に世話になったのは、稀代の中国通、後に早稲田大学商学部教授になる竹中憲一氏である。平岡氏は宿舎の部屋が隣だったので、朝食はたいてい一緒旅行も二回ともにし、その豊かな学識の由来を知ることができた。

初めての中国、見るもの聞くものが珍しくおもしろかった。宿舎は、ソ連との蜜月時代にお雇い露人用に建てられた北京友誼賓館、センターがある北京語言学院への往復は専用車による送り迎えである。外国人専門家を管理する部局が賓館内にあり、週末には観劇、展覧、小旅行などを企画してくれる。大使館で開かれた天皇誕生日の祝賀パーティー、メーデー前夜に人民大会堂で開かれた観劇会にも招かれた。四月末の数日の休暇には大連、学期末の休暇には華南、そして西安・洛陽に旅することができた。四ヶ月の仕事と滞在で、わたしの人生観は変

わった。中国が好きになったのである。

センターでは、毎週金曜日の午後、市民のために公開講演会を開催し、日本人講師が順番に担当した。わたしは、「素人偏好連句談」と題して、厚かましくも連歌から連句への歴史、現代の連句界のことなどを話した。広島で友久氏に手ほどきを受けた生智慧を披露しようとしたのである。その際、芭蕉のよく知られた発句のいくつかを、著名な日本学者林氏りんしんの漢語訳で紹介し、それを現代中国語音で朗読した。すると会場から拍手が沸き起こった。講演ののち、発音を指導してくれた竹中氏が、あの拍手は本物ですよ、と言ってくれた。外国語学習は基礎が肝心だということをしみじみと感じたのである。因みに、いま成城大学文藝学部で中国語を講ずる劉穎りゅうえい准教授は、センターの第三期生である。わたしの赴任が半年遅れていたら、そこで会うはずだったのである。この四ヶ月は我が生涯の黄金の日々であった。

平岡氏はよく短歌を作っては、朝の食堂に向かうときにそれを披露してくれた。わたしも氏に触発されて久しぶりに腰折れ歌を捻り、五カ年計画の終了時に編まれた『紀念文集』に「中国詠草」四十二首を寄せた。「長城に立てば遙かに北辺の峰かすみたり桃花さかりて」。

帰国すると、留学生関係の仕事、日本語教育の責任者の任務が待っていた。そして日本語教育に長く関わることになる。北京での講義のために現代語の文法を考え、文法研究史を調べて、この領域のおもしろさに開眼した。特に、英語学から日本語文法研究に転じた寺村秀夫氏の業績に多く学んだ。伝統的な国語学畑出身ではない人の目を見た日本語の深層である。その先蹤たる佐久間鼎と三上章の著作にも大いに啓発された。

五十八年に発表した「安萬侶の方法と古事記の訓読」は、日本思想大系本『古事記』の「割」字の訓「わる」

を取り上げてその非なることを論証したものである。以来、漢字の和訓の歴史を考え直す必要を自覚し、のちに成城の大学院で字訓史を二回講ずることになる。しかし、漢字それぞれに事情が異なるので、体系も歴史も描くことは難しいと知った。六十年に発表した「古代日本語における疊語の変遷」は、イトイトなどの疊語が縮約してイトドになったというたぐいの通説は、文献上からも理論上からも成り立たないことを主張した論文である。

昭和五十九年四月、岐阜大学教授に昇任する。その年の後期、名古屋大学総合言語センターへの留学が認められた。北京で一緒だった大坪一夫氏を頼ったのだが、氏は四月に筑波大学に転じたので、水谷修先生に受け入れられてもらって日本語教育を学んだ。そのころ、再び北京への招聘の話があった。大平学校の五ヵ年計画が終わり、名称も日本語研究センターに変わって、二年間の修士班、一年間の助教班、各三十人ずつを受け入れる計画の第一期が動き出していたのである。うれしいことに、教授会の雅量によって、翌年四月からの出講が認められた。

宿舎は四年前と同じ友誼賓館、センターのある北京外国語学院は近いので、自転車で行ったり、専用バスに乗ったり、稀には歩いたりした。同期の講師は、古典文学の高田衛氏、近代文学の前田愛氏、語彙論の土屋信一氏、中国語学の佐藤進氏、日本語教育の齋藤修一氏、比較文学の神田秀夫氏、日本思想史の源了圓氏、日本文化史の上原昭一氏、社会学の田中重好氏。センター主任は林四郎氏である。わたしの担当は、修士班の文語文法、助教班の日本語史、論文指導であった。

四年前の経験が役だち、全体に余裕があった。学生数が少ないので、賓館に招いたり彼らの宿舎を訪ねたりと、交流が密であった。市民のための公開講座は、従前どおり金曜午後に開かれた。わたしの担当は五月三十日、「精神史としての日本語」。大野晋、阪倉篤義、佐竹昭広の諸先生の驥尾に附して、動詞の格支配の視点から日本

語史を見るという夢想を語った。源了圓氏はおもしろいと言ってくれた。講演後、仿膳<sup>ほうぜん</sup>で食した清朝の宮廷料理は最高の美味であった。夏時間の北京の初夏、食後の散策も快く、忘れたい一日となった。

学期終了後、四年前とは異なって一人旅に出た。先に帰省している学生を訪ねて、南昌、九江、廬山、武漢などをめぐったのである。おりしも、江西省と岐阜県とのあいだに、友好関係を結ぶための交渉が進んでいた。ついでに同省を見て来ようという魂胆もあった。ちなみに、いま、成城大学文芸学部中国語の非常勤講師・費燕<sup>えん</sup>さんは、この期の助教班の最年少の学生であった。帰国後に発表した「文法教育再考」「形状動詞の諸相」も北京経験の産物である。

六十二年七月、美夫君志会の全国大会で講演を求められ、「孤字と孤語」と題して、萬葉集の本文を考える一つの視点を提示した。平成四年四月、岐阜県から「官庁用語見直し検討委員会」の委員を委嘱され、副会長を務めた。

岐阜大学では日本古代史の野村忠夫氏から教えを受けることが多かった。その縁で木簡学会、岐阜史学会にも入会した。木簡学会の全国研究集会にはほぼ毎年出席した。平成四年、京都で濱田先生によって興味づけられた和名抄地名の考察の二篇目の論を『木簡研究』に発表した。

成城大学からの招請をうけ、平成五年三月、十六年半勤務した岐阜大学を退き、妻を残して独り上京した。

#### 成城大学時代

平成五年四月、成城大学文藝学部教授に着任し、入れ替わりに栄転なさった佐竹先生の研究室に入る。山田学

長は、高校の級友佐川君が、角川書店の辞書編集部にあつて親しく接した人である。わたしは佐川君が編集に関わった山田氏の本を贈られていた、これも奇縁である。同期の教員は石原千秋氏、短期大学の小林千草氏である。最初の住所を川崎市麻生区に置いた。初年度は、佐竹先生担当科目の一部も受けもったので、のんびりした岐阜時代の二倍以上の労働になった。校務と平行して、『校本萬葉集』新增補第三次修訂版の編集、新日本古典文学大系本『萬葉集』の校注のしごとを進めた。

六月、加藤一郎学園長の紹介で成城合唱団に入った。翌年、新日本フィルハーモニー交響楽団の伴奏で歌う、モーツアルト「レクイエム」の練習が始まっていた。それは四月十四、十五の両日、昭和女子大学人見記念講堂で、レオン・フライシャーの指揮で演奏された。この演奏のあとは、フォーレの「レクイエム」の練習が始まった。一方、『萬葉集』校注の作業が本格的になり、共著者が日曜日に集まって議論する日程が頻繁に組まれた。かくて練習に参加できず、やがて退団した。楽しい夢を一回だけ見させてもらったわけである。

平成六年四月、大学を卒業して都心の会社に通勤することになった長男と世田谷区松原に部屋を借り、四年間の同居生活に入った。六月、「人麻呂の表記の陽と陰」を発表した。稲岡耕二氏の論に正面から反論した最初の発言だと思ふ。公刊当初はまだ稲岡氏の名声にかき消されていたが、近年は、歌を仮名書きした七世紀木簡の出土が続いて、卑見が少し有利になったと思ふ。以後、対象は様々ながら、「語彙論の術語〈位相〉考」「語源俗解考」「月夜の逢会・雨夜の禁忌〉考」は、特に誤用、通説、俗説がまかりとおる日本語学界・日本文学界への不満を吐露した論である。

平成十年、一年間の研修を許されて時間ができたので、それまでの論文を一書にまとめた。七月に韓国、九月

には中国に旅して、大学・博物館・高校などを訪ねた。韓国は初めての訪問で、かつて指導した留学生に再会し、三回めの訪問になる中国では、過去二回の出講で縁のできた人たちを訪問して回った。わたしのアスペクトの講義のノートが今も教室で役にたっている、と話して喜ばせてくれる教授もあった。

その後の数年間は、萬葉集・古事記・古代の表記法の論文を多く書いた。中でも「人麻呂歌集七夕歌説解法」は、孤軍奮闘する渡瀬昌忠氏の論を補強する形で書いたもの。渡瀬氏を支援する論は、後に「格助詞の射程」も書いた。これに対して、ようやく援軍が来てくれたという趣旨のはがきが同氏から届いた。一方、現代語についても、「人称詞考」「日本語練習帳・統貂」で、かなり時世的な発言をした。これはのちの「言語時評」廿篇の呼び水になる。

平成十五年、大学院の講義で『日本地理志料』を読んだ。京都で濱田先生に教わった「和名抄の地名」の講義の継承をめざしたのである。一人だけの受講者を相手に山城国から読み始め、冒頭で大発見することになる。池邊彌氏が大日本古文書に従って乙訓おとくとした、天平宝字六年六月の正倉院文書の文字「乙容」が、八木書店の『正倉院文書影印集成』では「乙右おたぎ」と読めるのだ。濱田先生は「容」に疑問をいだいていたが、当時は影印がなくて断定できなかった。ここには漢字音の変遷が絡む問題もあって複雑だが、大日本古文書の刊行からちようど百年目にして疑問が解けた、と自負し、唯一の受講者である小山拓哉君に感謝している。わたしはこれを契機に「和名抄地名新考」を書き起こし、六回で畿内の五国が完了した。

退職の日が具体的な姿を見せるようになるにつれて、書き残しておきたいことが次々に湧きだしてきた。その結果が「へ立ち上げる」非文の説せつであり、言語時評であり、萬葉歌についての論である。成城ゆかりの市民に

も語り残すべく、「成城 学びの森」の講義を、三期つづけて買って出た。すなわち、「ことばから考える古代日本人の世界観」「萬葉集からたどる日本語表現の流れ」「日本語の今―姿としくみ―」である。

昨春、九州に旅し、大宰府、柳川、日田、嘉麻、福岡を回った。いずれの町も因縁が深いのだが、特に柳川は、少年時代に北原白秋を通して憧れた町、その地の訪問が半世紀後に実現したのである。そして今年、国文学科一年生の「国文学基礎演習」の時間、近代散文の名品の一つと独断して、白秋の詩集『思ひ出』の序を読んだ。「私の郷里柳河は水郷である。さうして静かな廃市のひとつである。」（「わが生ひたち」2）。

## 著述目録

### ●論文

国語国字問題論

『焰』十四号 金沢大学文藝部 昭和三十七年二月

国語国字問題論・続

『焰』十五号 金沢大学文藝部 昭和三十七年六月

複訓仮名

『國語國文』第三十八卷十一号 昭和四十四年十一月

略訓

『國語國文』第四十一卷十一号 昭和四十七年十一月

上代形容詞語幹の用法について

『國語國文』第四十二卷七号 昭和四十八年七月

古代複合形容詞の一問題―清明の旧訓をめぐって―

『國語國文』第四十三卷三号 昭和四十九年三月

古代形容詞の形成に関する一つの問題―スミノエとスミヨシをめぐって― 『萬葉』九十号 昭和五十年十二月

日雙斯皇子命

『金沢大学国語国文』五号 昭和五十一年五月

上代における格助詞ニの潜在と省略

『國語國文』第四十六卷五号 昭和五十二年五月

格助詞と動詞との相関についての通時的考察

『岐阜大学教育学部研究報告・人文科学』第廿六卷 昭和五十三年三月



性急な思想―日本語語源学について―

『金沢大学国語国文』六号 昭和五十三年三月

中世形容詞の終焉

『論集 日本文学・日本語』3 中世 角川書店 昭和五十三年六月

言語資料としての和名抄郷名―音訓交用表記の検討―

『岐阜大学教育学部研究報告・人文科学』第廿七卷 昭和五十四年三月

形状言による副詞句の形成

『萬葉』百三十三号 昭和五十五年五月

古代文献における固有名詞の語形の変容 『岐阜大学教育学部研究報告・人文科学』第廿九卷 昭和五十六年二月

旅という言葉

『岐阜大学国語国文学』十五号 昭和五十七年三月

連体用法の「た」の解釈―アスペクト試論―

『岐阜大学国語国文学』十六号 昭和五十八年一月

安萬侶の方法と古事記の訓読

『國語國文』第五十二卷五号 昭和五十八年五月

語音構造から見た形容詞、もう一つの問題

『岐阜大学国語国文学』十七号 昭和六十年三月

古代日本語における疊語の変遷―イトドからイトイトへ―

『萬葉』百廿二号 昭和六十年八月

文法教育再考

『広島女子大國文学』三号 昭和六十一年八月

形状動詞の諸相

『岐阜大学国語国文学』十八号 昭和六十二年三月

孤字と孤語

『美夫君志』三十六号 昭和六十三年三月

孤立する訓仮名―憶良「老身重病」歌の「裳」―

『萬葉』百三十号 昭和六十三年十二月

この電車は新岐阜を出ますと新一宮に停まります―接続助詞「と」の一用法―

『岐阜大学国語国文学』十九号（三輪真弓共著） 平成元年二月

動詞と形状言との対応

『岐阜大学教育学部研究報告・人文科学』第三十七卷 平成元年二月

他民族イメージとその形成要因に関する研究―岐阜県下の学生・生徒の意識調査から―(六教官共著)

『岐阜大学教育学部研究報告・人文科学』第三十八卷 平成二年二月

木簡類による和名抄地名の考察―日本語学のたちばから―

『木簡研究』十二号 木簡学会 平成二年十二月

ミノ(三野・御野・美濃)関係の木簡・統紹

『岐阜史学』八十五号 平成四年七月

名語記私解

『岐阜大学国語国文学』廿一号 平成五年三月

人麻呂の表記の陽と陰

『萬葉集研究』第廿集 塙書房 平成六年六月

如泥―名語記私解・続―

『成城國文學論集』第廿三輯 平成七年三月

語彙論の術語〈位相〉考

『成城文藝』百五十五号 平成八年七月

語源俗解考

『成城國文學論集』第廿五輯 平成九年三月

〈月夜の逢会・雨夜の禁忌〉考

『國語國文』第六十六卷四号 平成九年四月

象徴詞と接頭辞―ぬなどももゆらに考―

『萬葉』百六十六号 平成十年七月

人麻呂の文字法―みやまもさやにまがへども―

『季刊文学』第十卷四号 岩波書店 平成十一年十月

鶴・西宮の法則の剰余―大宮仕へ安礼衝くや―

西宮一民博士喜寿祝賀論文集 『上代語と表記』 おうふう 平成十二年十月

〈被枕詞〉考

『成城國文學論集』第廿七輯 平成十三年三月

古事記は人麻呂歌集に後れたか―古代日本語表記史の問題―

- 西條勉編・上代文学会研究叢書『書くことの文学』 笠間書院 平成十三年六月
- 人麻呂歌集七夕歌読解法 『國語と國文學』第七十八卷十一号 平成十三年十一月
- 人称詞考 『成城文藝』百八十一号 平成十五年一月
- 日本語練習帳・続貂 『成城国文学』十九号 平成十五年三月
- 和名抄地名新考 『成城文藝』百八十三号 平成十五年七月
- 和名抄地名新考(一) 『成城文藝』百八十六号 平成十六年三月
- 和名抄地名新考(二) 『成城文藝』百八十七号 平成十六年七月
- 和名抄地名新考(三) 『成城文藝』百八十七号 平成十六年七月
- 和名抄地名新考(四) 『成城文藝』百八十七号 平成十六年七月
- 和名抄地名新考(五) 『成城文藝』百八十七号 平成十六年七月
- 古代地名の西東 『歴史地名通信』五十号 平凡社 平成十七年一月
- 濃飛和名抄地名新考 『成城文藝』百九十九号 平成十七年三月
- 複合動詞論序説―とれたて・うまれたて― 『成城国文学』百九十二号 平成十七年九月
- 〈立ち上げる〉非文の説 『成城文藝』百九十二号 平成十七年九月
- 格助詞の射程―のち見むと君が結べる― 『成城国文学』百九十五号 平成十八年三月
- 格助詞の射程―のち見むと君が結べる― 『成城文藝』百九十五号 平成十八年六月
- 助字から見た萬葉歌―満ち缺けすれそ人の常なき― 『成城国文学』廿三号 平成十九年三月
- 格支配から読む人麻呂歌集旋頭歌―手力つとめ織れるころもぞ― 『成城国文学』廿三号 平成十九年三月
- 和名抄地名新考(五) 『成城国文学』第三十一輯 平成十九年三月
- 日本語資料としての古代地名―地域と時代と― 『成城国文学論集』第三十一輯 平成十九年三月
- 『國學院雜誌』第百八卷十一号 平成十九年十一月

和名抄地名新考（六）

史学と語学のあいだー壬生をめぐるー

『成城文藝』第二百四号 平成廿年九月  
『成城国文学』廿五号 平成廿一年三月

●書評・学界展望

山口佳紀著 『古代日本語文法の成立の研究』

『週間読書人』昭和六十一年七月廿二日号

文法（史的研究）〈昭和六十一年・二年度における国語学界の展望〉

『国語学』第百五十三集 昭和六十三年六月

山口佳紀著 『古事記の表記と訓読』

『国文学』第四十一卷一号 學燈社 平成八年一月

鶴久著 『萬葉集訓法の研究』

『国語学』第百八十六集 平成八年九月

東野治之 『長屋王家木簡の研究』

『萬葉』百六十二号 平成九年六月

蜂矢真郷著 『国語重複語の語構成論的研究』

『国語学』第百九十七集 平成十一年六月

愉楽と警世の書ー山田俊雄著 『日本のことばと古辞書』を読むー

『成城国文学』廿号 平成十六年三月

●エッセイ

「言語時評」（『成城文藝』連載）

① 軽薄時代の象徴（しゃべる）

百八十五号 平成十六年二月

② 重言（過半数を超える）の論理

百八十六号 平成十六年三月

③ スポーツ報道の現在

百八十七号 平成十六年七月

- ④ アロヨ再び 百八十八号 平成十六年九月
- ⑤ いたただかせたがる日本人 百八十九号 平成十七年一月
- ⑥ 和魂和才のゆくえ 百九十号 平成十七年三月
- ⑦ 日本語をローマ字で書くということ 百九十一号 平成十七年六月
- ⑧ たが保存せしマンモスの脳 百九十二号 平成十七年九月
- ⑨ 気象の日本語 百九十三号 平成十七年十二月
- ⑩ 漱石が逆立ちをする可能性 百九十四号 平成十八年三月
- ⑪ しこな異変 百九十五号 平成十八年六月
- ⑫ 当世奇名辞典 百九十六号 平成十八年九月
- ⑬ Wの喜劇 百九十七号 平成十八年十二月
- ⑭ 起業きてれつ 百九十九号 平成十九年六月
- ⑮ 新聞醜悪録続紹 二百号 平成十九年九月
- ⑯ 新聞醜悪録続紹(承前) 二百一号 平成十九年十二月
- ⑰ 朗読者の務めと悩み 二百二号 平成廿年三月
- ⑱ 交通業界の日本語 二百三号 平成廿年六月
- ⑲ 悩ましきへの 二百四号 平成廿年九月
- ⑳ 一語の時代 二百五号 平成廿年十二月

「ははの言葉・ふるさとの心」(成城大学『民俗学研究所ニュース』連載)

(一) 六十号 平成十六年四月

(二) 七十二号 平成十八年四月

(三) 七十六号 平成十九年四月

(四) 八十号 平成廿年四月

●分担執筆・辞典項目・解説論文・新聞雑誌掲載分・言語随想・講演記録等

講演を聞く

『愛知県立惟信高等学校紀要』創刊号 昭和四十一年三月

東雅総論・書簡

桑原武夫編『新井白石集』〈日本の思想23〉筑摩書房 昭和四十五年五月

萬葉集の表記法

『国語科通信』廿八号 角川書店 昭和五十年一月

万葉仮名の成立と展開

『日本古典文学史の基礎知識』有斐閣 昭和五十年三月

文字との邂逅

『上代の文学』有斐閣 昭和五十一年三月

縁語・懸詞・枕詞

『国民百科事典』平凡社 昭和五十一年九月〜五十三年九月

新聞の用語における見出しと本文の間

『言語生活』三百十七号 昭和五十三年七月

Weston と 崔昌華

『月刊言語』第七卷八号 昭和五十三年八月

ミ語法とク語法・形容詞の活用形

『万葉集を学ぶ』第七集 有斐閣 昭和五十三年十月

和漢数詞の混用

『言語』第九卷十号 大修館書店 昭和五十五年十月

カグ山はカグ山

『毎日新聞』夕刊 昭和五十六年七月三日

「白石致仕後の心境」ほか六項目

『古典文章宝鑑』柏書房 昭和五十六年十二月

地名の語源について

『地理』第廿七卷七号 日本書院 昭和五十七年七月

古代日本語から見た昭和軽薄体

『中日新聞』夕刊 昭和五十八年三月廿二日

ことば遊びの歴史的考察―上代―

『日本語学』第十一卷十一号 明治書院 昭和五十八年十一月

語意考・日本釈名

『日本古典文学大辞典』岩波書店 昭和五十九年一月・六十二年七月

和名抄地名の有韻尾字訓注について

『国語学』第百三十九集 昭和五十九年十二月

笠金村ほか四歌人、九首

『日本名歌集成』學燈社 昭和六十三年十一月

槍を剝く

『国語学』第百五十五集 昭和六十三年十二月

木簡のことばと文章

『しにか』第二卷五号 大修館書店 平成三年五月

『春よ、来い』の言語学

『成城教育』八十八号 平成七年六月

ねじれた敬語の国、ニッポン

『こべる』八十四号 阿吽社 平成十二年三月

辞書編纂における研究者の責任

『国語学』第五十二卷一号 平成十三年三月

萬葉集を読むための三つの視点

『別冊國文學』「必携」万葉集を読むための基礎百科 學燈社 平成十四年十一月

学界再生のために

『国語学』第五十二卷二号 平成十五年四月

倭大后の歌・高市皇子の歌

『セミナー万葉の歌人と作品』第十二卷 和泉書院 平成十七年十一月

地名の時代性

『日本歴史』一月号 吉川弘文館 平成十九年一月

動詞（理論・一般）・動詞（日本語史）

『日本語学研究事典』明治書院 平成十九年二月

引用と段落をめぐる閑話

『成城国文学』廿四号 平成廿年三月

佐竹昭広「音と光―「玉響」解説の方法―」〈この一篇〉

『成城国文学』廿五号 平成廿一年三月

●編著書

『校本萬葉集新增補』（共編著）

岩波書店 昭和五十三年～五十七年

『岐阜県の地名』〈日本歴史地名大系〉（共編著）

平凡社 平成元年

『校本萬葉集新增補』第三次修訂版（共編著）

岩波書店 平成六年

『萬葉集』〈新日本古典文学大系〉（共著）

岩波書店 平成十一年～十六年

『日本語史の諸相 工藤力男論考選』

汲古書院 平成十一年

『日本語学の方法 工藤力男著述選』

汲古書院 平成十七年

『萬葉集校注拾遺』

笠間書院 平成廿年

『かなしき日本語』

笠間書院 平成廿一年四月刊行予定